080

箱根駅伝初優勝

毎年正月の二、三日は、箱根駅伝の応援を恒例としている方も多いだろう。初期の箱根駅伝や本学初優勝の様子はどのようであったかを振り返ってみよう。

箱根駅伝は前年に第一次世界大戦が収まり平和が回復した一九二〇（大正九）年に、報知新聞社により大学・高等専門学校が参加する日比谷箱根往復対抗駅伝競走として始まった。この第一回大会は二月十四、十五日の両日、東京高等師範学校（現筑波大学）・明治大学・早稲田大学・慶応大学の四校が参加して行われ、東京高等師範学校が優勝した。当時のコースは、有楽町の報知新聞社前から箱根関所跡までの往復で、総距離は一二〇哩（マイル）（約一九二キロ）といわれている（現在は大手町読売新聞社前～芦ノ湖畔駐車場の二一七・九キロ）。

本学は翌年の第二回大会から参加し、第五回は選手の資格問題で他校と意見の対立もあり参加しなかったが、以後はすべて参加し、出場回数は二〇一〇年現在八四回に及んでいる。

本学の初優勝は、二六年一月九、十日に開催された第七回大会のことであった。この大会は、本学のほか、三連覇をねらう明治、そして日本歯科医専（現日本歯科大学）・慶応・法政・東京農業・東京帝国大学農学部実科の各校が参加、「七大校対抗駅伝競走」と呼ばれた。

本学の選手は往路が第一区から佐藤正視、中川英男、山本光三、津島仙太郎、平野太郎七、復路が第六区から山崎岩男、西川行雄、宮本源太郎、文天吉、湯本幸一の計一〇人であった。

前年の大会で三位に甘んじた本学競走部は、この大会に向けて猛練習を重ねていた。アンカーの湯本は『中央大学学友会誌』第五巻第二号の中で、「血涙の誓の実行の時は熟さんとしてゐる。あと二ヶ月にして復讐駅伝競走は迫る。捲土重来（けんどちょうらい）私達選手は死を賭して愛する母校のため戦はねばならぬ。そしてあの中大にとつて恨み多き優勝旗を獲得せねばならぬ」とその決意を述べている。

中大初優勝の記念写真

大会当日、スタート地点である報知新聞社前は、前日から降り続いた雪で真っ白であった。午前八時のスタート、中大は第一区こそ三位であったが、二区で中川がトップに躍り出ると以後ずっとその位地を守り続け、二位明治大学に7分48秒の差をつけて箱根のゴールに平野が跳び込んだ。

当時は現在とは違い、各選手に伴走車がつくことが許されていた。この時の本学の伴走サイドカーの後には赤地に白で「CHUO」・「中央大学」とそれぞれに書かれた二本の応援旗が立てられ、その縁には黒の喪章が縫い付けられていた。前年の年末に亡くなった岡野敬次郎学長を偲んでのことであった。

二日目の復路では、トップを守りながらも徐々に追い上げられ、最後の十区では二位明治大学の猛追にあい、鈴ケ森ではついに逆転、大井から品川にかけては逆に約二分の差をつけられてしまった。しかしゴール間近になった日比谷交差点付近でやっと再逆転にこぎつけ、熱狂する応援団の待ち構える中、午後二時五九分四五秒、ついにアンカー湯本がトップでゴールしたのである。

本学のタイムは往路7時間17分46秒、復路6時間59分45秒、総合14時間17分31秒で、二位明治大学に41秒差という記録であった。

二〇一〇年現在、本学は箱根駅伝の記録のうち、出場回数（八四回）、優勝回数（一四回）、連覇回数（六連覇）で第一位となっている。

出典：『タイムトラベル中大125:1885→2010』第2版。一部修正を施している場合があります。